

令和4年2月の解説（週間天気予報）

【2月の天候状況】

上旬は、シベリア高気圧が東シナ海や日本の南まで張り出し、千島付近やアリューシャン付近で低気圧が発達しました。北日本を中心に冬型の気圧配置が強まりましたが、東シベリアで気温が高かったため、平均気温は北日本で平年並、東日本と西日本で低くなりました。5日～6日頃には強い冬型の気圧配置となったため、6日に滋賀県米原で62センチ、札幌で60センチの24時間降雪量を記録するなど、北日本日本海側から山陰地方にかけて記録的な大雪となった所がありました。降水量は、冬型が続いて湿った空気の影響を受けにくかった北日本太平洋側と、低気圧の影響を受けにくかった西日本日本海側でかなり少なく、西日本太平洋側で少なかった一方、冬型の気圧配置で雪の日が多かった東日本日本海側と、低気圧や前線の影響を受けやすかった沖縄・奄美で多くなりました。日照時間は、湿った空気の影響を受けにくかった北日本太平洋側で多かった一方、日本の南や本州南岸の低気圧や前線の雲が広がりやすかった沖縄・奄美と西日本太平洋側で少なくなりました。

中旬は、11日、13～14日頃に、日本の南を通過した低気圧や前線の影響で、沖縄・奄美では降水量がかなり多く、日照時間は少なく、東日本太平洋側では降水量は多くなりました。15日～17日頃にかけて、上空の寒気を伴った低気圧が日本海北部をゆっくり進んだ後、北日本付近を高気圧が通過し、更に日本海北部と、本州南岸から三陸沖を、それぞれ低気圧が北東進しました。高気圧が通過して冬型が解消し、晴れた期間があったため、北日本日本海側の日照時間はかなり多くなりました。日本海をゆっくり進んだ低気圧の影響で、その西側の西日本で寒気が流れ込み平均気温も低くなった一方、東日本日本海側では湿った雪となって降水量が多くなり、17日には新潟県新津で、2月として記録となる24時間降水量58.5ミリを記録しました。また、本州南岸から三陸沖に北東進した低気圧の影響で北日本太平洋側で降水量は多く、日照時間は少なくなりました。

下旬は、21日～24日にかけて、発達した低気圧が千島からアリューシャン近海に進み、冬型の気圧配置が強くなり、北日本と東日本の日本海側を中心に大雪や暴風となった所がありました。北日本ではその後も冬型の気圧配置となりやすく、27日には津軽海峡付近を低気圧が通過したため、日照時間は北日本日本海側でかなり少なく、北日本太平洋側と東日本日本海側で少なく、降水量は北日本日本海側で多くなりました。大陸からの寒気が流入した東日本、西日本と沖縄・奄美の平均気温は低くなりました。25日～26日頃に、華中付近で高気圧が強まり、東日本太平洋側と西日本太平洋側を中心に大陸からの高気圧に緩やかに覆われました。このため、東日本太平洋側と西日本太平洋側ではおおむね晴れて、東日本太平洋側と西日本では、降水量はかなり少なく、日照時間はかなり多くなりました。降水量は東日本太平洋側で平年比2%、西日本太平洋側で平年比1%となり統計開始以来2月下旬として1位、西日本日本海側でも平年比25%で1位タイの少雨となり、日照時間は西日本日本海側で平年比145%、西日本太平洋側で平年比148%で統計開始以来2月下旬として1位の多照となりました。

【2月の検証結果】

「降水の有無」の全国平均の適中率(3～7日目平均)は、例年値^(注)よりも9ポイント高い82%でした。地方別の適中率では、すべての地方で例年値を上回りました。

最高気温の予報誤差(2～7日目平均)は、全国平均で例年値よりも0.6℃小さい1.7℃で、すべての地方で例年値よりも小さくなりました。また、最低気温の予報誤差(2～7日目平均)は、全国平均で例年値よりも0.4℃小さい1.7℃で、東北で例年値と同じだった以外は、各地方で例年値よりも小さくなりました。

(注) 例年値は気象庁HP(予報精度検証)内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【4月の週間天気予報の利用にあたって】

4月は、短い周期で低気圧が通過し、天気が変わることの多い時期です。暖かい日が多くなる一方で、低気圧の通過後に冷たい空気が流れ込んで前日より気温が大きく下がることもあります。寒暖の差が大きい時期です。週間天気予報で気温変化を把握し、健康管理や農作物の管理等にお役立てください。